

幼児の認識と身体発達

——シェマの構成とその機能——

古 庄 高

I 緒 論

われわれは行動の発達・進化という現象を、J. Piaget に従って、同化と調節とを契機とした主体と環境との相互作用における平衡の弁証法的発展として示すことができるだろう。同化とは主体が外的事物を自己の行動のパターンの中に組み入れて、それを統合していく活動を意味している。従って同化のシェマは、有機体の遺伝的な器質構造に基づいて主体が徐々に獲得し、構築していくものである。ここでいうシェマとは、活動がシェマ(図式)として構築されることにより、活動が実践的可能性の地平に移行して、刺激に対する直接的反応というかたちで遂行されるのではなくて、現実的活動が総体として単に素描されるようになることを表現している¹⁾。すなわち活動がシェマとして確立されると、活動が現実の行動として行われなくても、潜勢的なかたちで、いわば準現前として主体に対して現われるようになり、知覚された対象もこの素描された活動そのものによって主体に受け入れられるようになるのである。主体は、外的事物が自己の活動のシェマに組み入れられる限りにおいて対象を<知る>のであり、また知覚されたもの、理解されたものに<意味>を与えるのである。他方外的事物、更には環境から主体にもたらされる影響は、主体の同化のシェマに対してある変容を求める。それは主体が環境を自己のうちにとり入れる同化作用とは逆に、環境へ向かって自己のシェマを調節する作用である。しかしここで言う活動を、それ自体孤立した、もしくは独立した一つの系として考えるべきではない。活動は全体の流れ、及び主体の存在そのものを背景としてこそ初め

て可能になるのであり、いわば主体と環境との相互作用あるいは交流そのものを意味している。また活動のシェマは諸器官の解剖学的・生理学的構造に結びついており、これらの有機的構造を使用することによって、ダイナミックな機能的形態を構成していくのである。構造と機能とは、主体の活動において相互作用を通じて一つの機能的全体を構成するのであるが、活動が異なった状況に適用されたり、反復されたりしてシェマ化していくにつれて、構造の機能的可能性は次第に増していき、また同時にシェマ自体も組織化がおし進められて、ついには新しい構造の出現を促すものとなるであろう。更にシェマの組織化は、環境との相互作用において、同化と調節との平衡が確立されることに基づいているのであるから、行動や認識の発展はこの平衡を可能にする諸器官の自己調整及び調整器官の組織化と結びつけて考えなければならない。主体における対象的所与が、素描され抑制された反応の総体の中に統合されるためには、これらの反応の総体を構成する諸器官がそれ自体において調整されることを必要とするが、単に器官そのものに限らず、進化の過程における調整器官の発達によっても補償されており、この二つの自己調整過程の結果として素描される反応の総体は拡大し、全体的行動に統合される主体にとっての対象的所与の意味は実践的な諸可能性に規定されたところの、次第に体系化し、組織化していく意味連関の網目のなかに統合され、その中に位置づけられるようになるのである。従って主体と環境との相互作用である行動や活動は、この全体的行動の指向的内容としての対象の体験された意味、すなわち現実的行動を抑制する素描の運動そのものによっ

て基礎づけられており、後者は現実の遂行過程の地平を構成している。しかしこの指向的内容は実際の遂行そのものの過程では全体的行動の構造的・形態的枠組みの中に統合されねばならず、その限りにおいて現実の行動は指向的内容をのり越えるのである。一般に体験された対象の主体にとっての意味は、同化と調節作用に基づいたスキーマの組織化及びこの組織化を可能とする有機的構造そのものの組織化の表現だと考えられよう。認識の機能がこのように主体と環境との相互作用として展開され得るのであれば、われわれは後述する〈象徴機能〉や〈表象機能〉を媒介とした概念的認識と、行動の段階における活動スキーマを媒介とした実践的認識とを、前者を心的なもの・抽象的なものに、後者を生理学的なもの・具体的なものに還元して区別するわけにはいかないだろう。この両者を同時に考察しようような連続的過程、すなわち構造的諸形態の非連続性を生み出し、また可能にしている機能的作用の連続的性格の把握を試みたい。

II 調整系の発達と認識

細胞の原形質を構成しているタンパク質は常に分解・生成しているが、タンパク質の合目的機能は自己調整系としての立体特異的構造によって可能になっている。またタンパク質代謝において触媒機能の働きをする酵素によって、細胞内の反応は阻止されたり活性化されたりする。従って分子レベルの調整器官の働きはこのアロステリック酵素に負っているわけである²⁾。細胞内の現象はこのように物理—化学的作用の現象として説明されてくるが、しかし組織や器官の構成をタンパク質間の相互作用に還元するわけにはいかない。というのも、タンパク質の相互作用は組織や器官の構成によって逆に規定されており、それは全体の中の部分ではないからである。このことは環境との直接的相互作用を行う単細胞生物の行動をみていけば明らかになるだろう。

アメーバは最も原始的な生物であるが、その移動における運動的形態は物理—化学的反應によってではなく、環境に適応した摂食・防御・生殖といった基本的要求を満たしうる環境との相互作用によって規定されている。更に、受容器と効果器との分化（ゾウリムシ）や、光に定位した運動（ミドリムシ）もみられる。しかしこれらの原生動物の行動は、単細胞内の反応及び細胞の分化にしか基づいていないので、行きあたりばったり式であり、有意的行動をとることができない。このことに関連して主体の側においても環境の側においても全く未分化の状態にあり、両者の関係は、刺激に対して正または負の方向しかもたない〈キネシス〉の運動に媒介された〈刺激感应性〉以上のものは含んでいない。多細胞生物になると個々の細胞の機能・閾値・エネルギーが異なるので、細胞間の伝達及び運動調整の為の器官として神経系が出現する。更に細胞はそれぞれ受容器や効果器を構成するものとして特殊化され、神経系もまたそれらの器官に分化する。現実的運動として反射的な位置の移動が行われるようになるのであるが、この運動は諸器官の分化と組織化によって、キネシスの運動が抑制され、素描されて実践的可能性の地平を構成することによるだろう。この地平が指向的内容を規定し、反射運動に結びつく刺激とそうでない刺激とが区別されるのである。一般に神経系が神経網・放射状神経系・左右相称の神経系というように進化し組織化すると、それに平行して運動の面では筋肉運動・反射・反射の全身による統制が現われ、主体と客体の面では刺激感应性が意味の単位を担う感覚に、そして感覚野にと発展する。例えばイソギンチャクやクラゲなどは最も簡単な神経系しかもっておらず、それらの運動は反射性によって特徴づけられる。ここでみられる反射運動はまだ刺激の物質的特性によって惹起され、それ故運動の方向も環境との物質的關係で生じるから、方向そのものを目指した有意的運動には至っていない。イソギンチャクには、自

ら触れたものと触れられたものとの区別がまだ存在せず、従ってどちらの場合にも同一の反応様式でもって反応するのである³⁾。ただ反射弓の運動はそれが反復されることにより、諸器官の組織化と神経系の統合を構築するだろう。次に左右相称の神経系が出現して調整の機能が中枢化してくると、反射運動に含まれていた方向は刺激に対する直接的反応の方向としてではなく、可能的な位置移動の地平に含まれて、可能な諸方向から選ばれた一つの定位された方向の中に吸収されるのである。神経系の中枢化は〈姿勢活動〉(Wallon) すなわち、体の各々の部分を姿勢全体に対して調整する機能の発達を意味している。従って刺激の側においても、また運動の側においても、有機体全体との関わりにおいて規定されるようになり、純粋感覚は領野としての感覚野に統合される。神経中枢に基づいて遂行される〈姿勢活動〉の機能は、その中に素描された反射の方向を可能性としてもつことができるようになり、更には反射運動の器官や神経系の自己調整系に支えられて、触れたものと触れられたものとの区別を可能にする。つまり自己運動に属する感覚と外からくる刺激の感覚とが分化するわけである。無脊椎動物でも頭足類や節足動物になると感覚器官が非常に複雑になり、視覚的識別能力や形態識別能力も高度に発達していることが明らかにされている。反射は〈姿勢活動〉を背景としていくつかの単純な反射を複雑に組みあわせ、組織化すること、つまり感覚野となることによって多くの行動パターンを構成する。しかしこれらの段階の行動パターンはあくまでも刺激と結びついた反射から成っており、刺激に対する反応というかたちの内的環境しかもつことができないであろう。

これが脊椎動物になると反射運動そのものが統合されて、一つの組織化された型の反応が起こる。この反応は有機体の多くの部位が相互作用によって統合されねばならない。同時に、受容器が発達していろいろな刺激に選択的に反応

するようになり、これが脳の分化を促進することとなった。一方では反射が他の刺激や情報に従って制御されるようになり⁴⁾、他方では様々な感覚の極として対象、〈感性的外在性〉が措定されるようになる。刺激が〈外在的なもの〉として現われ、感性的意味が内的環境において感じられるばかりでなく、外的対象にも投射されるのは、この段階である。更に筋肉からのフィードバック機構を構成することから、反射運動の相互作用だけでなく、神経系の組織化において保持された運動のシマが主体の行い、反射により定位された運動の素描の中であらかじめ準備や待機の態勢として予料されうようになる。哺乳類では皮質化が進み、感覚器官・運動器官の分化、皮質の分業及び感覚系と運動系の統合、自律神経系の調節的機能などが出現する。そして情動を惹き起こすものとして、感性的意味の投射された外的事物はもはや現在の体験に制限されず永続的な意味が付与されて、以前の〈感性的外在性〉の素描と抑制を通じて〈持続的外在性〉において措定される。このことは、情動を延期し、保持して現在を越えた意味の関係を対象との間にうちたてることである。すなわち知覚された対象の意味はそれが主体の目指す対象への一連の活動の中に組織化され、統合されることを意味している。

以上のような神経系の進化と平行した行動の発展とは別に、一般に本能と呼ばれる行動様式についてここで述べておこう。本能的行動様式は走性や反射の刺激に対する定型化した反応の延長であるが、いくつかの点でそれらの反応をのり越えていると思われる。まず本能的行動は内部環境の条件に従ってさまざまに変化する。例えばホルモンの作用は非常に重要なものとして挙げられるだろう。ホルモンの作用は孤立的ではなく、系として作用するから、本能的シマは内的相互作用によって補正されている。更に本能的行動を解発する刺激は、単に行動の引き金として作用するだけで充分である。

(Innate Releasing Mechanism) すなわち

Releaser としての刺激は本能的行動が行なわれている間じゅう継続して作用する必要はない。この刺激の特徴は一般に複雑な空間的・時間的パターンをもっており、更に刺激は種々の特異性をもった〈信号刺激〉から構成されている。従って反射の場合とは異なり、個々の刺激ではなく全体的パターンが問題なのである。他方刺激に対する本能的行動の方も、反射的応答を抑制して全体的行動の中に統合してしまう。このようにして K. Lorenz が〈儀式化 Ritu alization〉と呼ぶ、本来の生物学的意味から離れて異なった第二の意味をもつ行動様式が発達する⁹⁾。本能は遺伝的枠組みをもっており、内的に規定された前一個体的 (Preindividual) なものであるが、行動が実際に遂行されてシエマの結合や再結合が環境との相互作用において行なわれるかぎり、単なる反射的運動よりも可変的で可塑性に富んだ適応的行動と言えるだろう。また、しばしば本能的行動と呼ばれる諸作用の中に、不可欠の学習あるいは練習の要因を含んでいることも知られている⁹⁾。K. Lorenz はしかし本能的行動様式の変異性及びこの可変性を支配する法則を、学習や経験に結びつけて考えることを明確に否定している。経験による影響は生得的メカニズムに基づいた本能的行動様式の遂行に関してのみ考慮に入れられるわけである。すなわち生得的メカニズムの機能は経験以前に存在する点において〈先験的なもの〉である⁷⁾。しかしわれわれは生得的メカニズムそのものが主体と環境の相互作用の結果でしかないことを示してきた。すなわち生得的メカニズムは以前の段階の同化と調節のシエマの平衡を、器官の組織化や自己調整器官の発達をとおして獲得される構造的平衡に至らしめたものとして、それ故既に経験や学習を潜在的に含んだものとして考えなければならないのである。系統発生からみた生得的メカニズムがこのように同化シエマの自己調整化と見做せるのに対し、個体発生からみた遺伝子のプログラミングも環境から最も孤立した系でありながらも環境とは

無関係ではありえない。器官をそれを構成する細胞に還元できないのと同じく、遺伝子型を個々の遺伝子の単なる集まりとして考えることはできない。Driesch の実験以来、発生は遺伝子間の相互作用の体系、すなわちゲシュタルトとして考えられるようになった。もちろんこのゲシュタルトは W. Köhler のような静的なものではなく、動的に発達するゲシュタルトである⁸⁾。胚発生の過程はその初期条件に従って一定のコース(クレオード)が決定されるが、それは遺伝子間の相互作用によって補整作用 (ホメオレシス)が働くからである。クレオードは遺伝子の決定性と可変性の平衡を示しており、環境からの影響がある限度を越えない限り発生が補整作用を受けることを示している。またホメオスタシスが共時的平衡を示しているのに対し、ホメオレシスは発生の諸段階において時間的にも規定された通時的平衡の機能である。本能的行動は行動の内容と形式、及び Releaser が遺伝されてはいるが、前述したようにシエマが全体的パターンに統合されること、及び胚発生の段階から環境に対する個体の調整が存することにおいて、内生的な本能のメカニズムを遺伝的プログラミングに還元することはできないように思われる⁹⁾。

Ⅲ 身体的発達とシエマ

幼児の発達は反射運動から開始するといえるだろう。誕生時にはまだ大脳皮質の成熟が完成されていないので、分化した諸器官も直ちに随意的な機能を遂行することができない。幼児は快・不快という純粋感覚しかもつことができず、主体と客体の分離は存在していない。神経系の調整作用はまず頭部や躯幹の筋肉運動の支配から始まり、これが姿勢活動を発達させるだろう。この段階では内部感覚と結びついた全身的で未分化な緊張性反応及び局所的な防御反射が多くみられる。これらの反射——例えば嚥下運動——は反復されることによりシエマ化してくる。未分化な反射運動が刺激の方向に定位さ

れるようになるのは 3—4 週間の間 (Wallon) であり、内部感覚的な全身反応を抑制して外部感覚へ向かわなければならない。すなわち諸感覚の間に連絡が可能になって、反射の際の未分化な刺激ではなくて個々に区別される刺激が感覚野の統一として出現する。しかしこの場合には空間はまだそれぞれの器官のシェマの空間にしかすぎず、統一のない異質空間であり、それ故個々の刺激は主体の内在性のなかにしか見出すことができない。外部感覚に対する諸反応は、一方では感性的意味をもった事物の感覚を、他方では感覚に応ずる反応を感じることに、以後絶え間なく発展する知覚と運動との、Weizsäcker が〈ゲシュタルト・クライス〉と呼んだ運動形式の発生における交差関係 (Verschränkung) が出現する¹⁰⁾。3 ヶ月になると頭部と視線とが安定して、4 ヶ月では大脳の発達に伴う姿勢の統制が可能になる。(Wallon) それと同時につかむ動作 (目と手の協調) が現われ、空間の同化がなされる。従って体験的内在性 (感覚野) においては定位を担う諸感覚の統合として主体の体験のうちにしかなかった外的事物が、つかむ動作の出現のあとには预料され、目指された物として初めて主体から分離し、〈外在性〉として扱えられるようになるだろう。またそれまでは自分の体にだけ関係していた知覚と運動の相互作用は、姿勢活動が自己調整によりそれ自体背景的活動となることによって外的対象に関係した反応、つまり対象へ向かう際の運動と知覚との調整ができるようになる。しかしこの外的対象は現在の活動と不可分であり、永続的に所有されたものとしては扱えられていない。実在性をもたない対象は定位された運動を素描することにおいて、指向的内容のなかに吸収されることであり、基本的な空間体系が異質空間の組織化によって次第に構成されつつあることを意味している。実体としての対象、すなわち視界から消えた対象も依然存在するのだということがわかるようになるのは 9 カ月になってからのことである。(Piaget) 外

的事物と関係するようになったシェマがここでは手段のシェマと目的のシェマとに分化し、対象との指向的關係は時間的・空間的に拡大する。しかし現実の行動に含まれている手段と目標との実在的關係そのものはまだ意識されておらず、単に全体の場面で目標と結びついた媒介物への動作あるいは媒介的動作がなされるにすぎない。すなわち対象が実在的な物にまでなっているにしても、それが実在的關係の総体の中に位置づけられるまでには至らず、場面あるいは活動における実際の永続性にすぎないし、目標へ向かう手段となる動作や事物は場面の偶然性に支配されたままになっているのである。

このように対象の認識が進歩するのと平行して、自己の身体についての認識も変化してくるのがみられるだろう。反射運動の快・不快という全くの情動性から、感覚野の生成及び姿勢の調整をとおして内在的ではあるが一定の方向へ向けて全身を組織化できるようになる。次に姿勢の統制が可能になり、外在性として対象が自己の身体から区別されるようになると、全身運動による定位が諸器官の定位に分化する。そして諸器官の空間が体系化するのと同じく、諸器官の感覚が相互に結びついて活動においてお互いにどのように対応するかということが把握されるようになるのである。しかし器官相互間の感覚の統合はまだ現実的運動に現われているだけであり、手や足の運動を予め調整したり予期することはできない。自己の身体が個性化できるようになるのは実在性をもつ対象が確立されたときであると思われる。器官の運動が対象に向かう行為のなかに統合されるということは、行為の指向的内容として器官の運動が予め预料されるようになり、またその運動から生じる感覚までも预料されうるようになることを意味している。このような器官の運動の自己調整こそ手段のシェマと目的のシェマの共応を可能にするのであり、更に自己の身体を他の外的事物とは異なる固有な存在として認識させるのである。しかし 6 カ月の子供は片方の手で足や他方の手

に触れるとき、触れられた方の感覚をうまく処理できない¹¹⁾。つまり対象への運動やある動作の遂行過程においては統一的意味をもつ身体の個性性も、個体化した身体あるいは受動的な存在としては意識していないので、客観的空間に位置づけることができないのであろう。鏡像が実在として扱えられ、あるいは自分の鏡像を他人から見た自分の姿だと見做すことができないのも、そこを中心にして方向づけや活動が為される自己の身体と自己意識とがあまりに密接に結びついたままになっているからであろう。他方対象の実在化は目標の対象を活動のシエマの中で指向的内容として含んでいるのであるから、知覚された対象は前以て目指された意味と同じく予料される限りの、現実には知覚されていない知覚をも指し示している。この直接的な知覚を越えた対象の予期あるいは再構成は標識(index)の機能を意味している¹²⁾。標識の機能は子供がそれまでは自分の身体に関してのみ可能であった動作やその動作の結果生じる感覚の予料が、対象との関係においても構築されるようになることである。このようにして例えば視知覚において扱えられた標識は触覚や筋肉運動知覚においても内的に扱えられ素描されて、手や運動を予め対象に調整できるようになるのである。標識は対象との関係における＜象徴機能＞の原初的形態と見做すことができよう。他方自己の身体的運動による標識作用も出現する。感性的外在性でしかなかった対象の段階（つかむ動作）では、器官や運動の統一は現実的運動の過程においてのみ遂行されうようになっていたにすぎないが、運動に対する予期的調整の可能になったこの段階では運動の統一形態であるシエマあるいはゲシュタルトそのものが意識され、体験されるようになるので、その運動によって主体の目指す意味（意図）が運動そのもののうちに＜表現＞されうようになる。言い換えれば、行動の一部の形態が原初的象徴機能として行動の意図を指し示す。それまでは体験的内在性においてのみ感じられていた

意図が、運動の形態化を体験することによって、ここで初めて行動のなかに表現される。標識の機能は活動のシエマ化の結果にすぎないが、シエマとして意識することにより、手段のシエマと目的のシエマとの共応を可能ならしめ、また同一のシエマをいろいろな対象に試みて一般化していくのであろう。新しい対象にシエマを使用すること及びシエマの共応は、シエマの調節を必要とする。自己調整のかたちで遂行された調節作用が、行動にも現われるのはこの段階である。

1才になると活動シエマの組織化はますます進み、シエマの意図的調節が柔軟になってくる。またもはや2つのシエマの共応ではなく、多数のシエマの共応及び対象に対する調節作用に基づいたシエマの系列化が生じるようになる。(Piajet) ところが子供はこの系列化そのものを目指しているのではないから、対象との実在的関係の枠組みをもって手段のシエマや媒介物への動作を行なっているわけではない。単に2つの物を押して並べたり、あるシエマの後に他のシエマを遂行する。このような経験は新しい対象や、シエマの共応に基づく新しいシエマの出現を促すものである。さて媒介する対象を現実の場面で偶然そこにあるもの、すなわちまだ目標と未分化な状態から媒介するものとして意識するようになるのは18カ月以降になってからである。この段階は活動シエマに基づく主体と環境の相互作用、Piajet のいう感覚運動知能、Wallon の場面の知能の最終的段階を示している。シエマの共応と系列化は目標にうまく適するような調節作用を可能にするが、まさにこの調節作用こそ手段のシエマを特定の対象との結合から分離させ、目標との機能的関係において手段のシエマを意味づけるのである。対象を自分の方に引き寄せる為には棒でも布でも手段となりうる。現実的行動でみられたシエマの系列化が、もはやシエマの内容によってではなくその機能的意味によって定義されるようになると言えるだろう。従って媒介は偶然に与えら

れるのではなく、主体によって媒介として意識されるようになる。象徴機能はここでは対象の一部である標識ではなくて、心像に基礎づけられるようになる。心像とは活動の内的遂行に他ならない。他方心像があくまでも活動の遂行である限り、心像は現在の場面から切り離されることができず、媒介の意識は媒介そのものの保存や生産の意識には至らないと考えられる。何故なら心像が現実の活動から分離するのは、心像の体系化を前提にしているからである。また心像は知覚的標識の内面化であり、具体的象徴である。すなわち知覚的標識が対象の存在を指示するのに対し、心像は対象が主体の内的活動に吸収される限りにおいて対象の機能的意味を指示する。他方標識の段階では活動の意図は具体的活動の一部によって表現されるだけで活動を統一する意図をその活動形態に結びつけて、両者をいわば対にして意識することはなかったが、具体的活動を内的に遂行する心像の段階ではシマの共応や対象の意味は意図と不可分になっているのである。延滞模倣や擬態の出現は同じようにして説明できるだろう。一般に模倣の行為は既に獲得したシマにモデルを同化することから始まる。従って模倣の始まる時期は姿勢が統制されてシマが分化し、運動の予期的調整が可能となるときであり、子供が自分の動作を見ることができる、既にシマとなった活動及び自分の発声に含まれている音の模倣が可能になる。対象が実体として扱えられ、標識の機能の出現する9ヶ月頃から、シマとして獲得されてはいるが自分では見ることのできない活動の模倣が始まる¹³⁾。対象に対応する調節作用がモデルの正確な模倣を可能にしてくれるが、調節作用がシマの系列化と共に体系化するようになると、シマに属していない新しいモデルの模倣もできるようになる。これはシマの内的共応作用によって可能になるのであろう。延滞模倣は活動の心像や指示でもって内的に模倣する行為であるが、内的模倣が活動形態を意識していることは明らかであると思われる。

る。ふりをする行為は意図と活動形態との結びつきを利用する。心像の段階では他の事物をまぐらの代わりして寝るふりをするのが見られる。このようにして象徴機能は実際の場面や現実の対象から次第に離れてくるのである。心像の段階がのり越えられるのは心像を保存し、体系化することによって対象の様々な意味を観念的に意識することによってである。表象は心像による現実の再構成として2才頃出現すると思われる。

一般に感覚運動的知能の発達とは主体の行動の発達と平行して考えねばならない。反射や本能が器質的構造に基づいているのに対し習慣や感覚運動的シマは器質的構造を環境との相互作用によってのり越え、新しい行動形態のなかに統合するのである。本能は反射的行動を全体的意味のもとに系列化するので環境との相互作用はより複雑でかつ適応性に富んでいるが、遺伝的枠組みの規定という限界をもっている。習慣は刺激-反応関係を一般化してシマの刺激からの相対的自律性と恒常性を獲得する。このことは刺激に対する直接的反応を抑制し、保存することによって刺激の意味を相対化し、比較・分類することを意味している。習慣は単なる活動の組み合わせでなくて、習慣的行動そのものから意味を与えられる諸活動や対象の系列化なのである。ところが習慣的行動にみられるシマの組織化は組織化としては意識されておらず、習慣は行動の各時点で運動と知覚とを結合して全体的行動を構成する。従って迷路を学習したネズミは迷路の全体図や Tolman のいう cognitive map を作っているわけではなく、その都度知覚標識に基づいて行動や方向を決定しているのだと考えられる。象徴機能の能記が標識から心像へ発達すると、それまでは主体自身の行う活動のシマがそれぞれ手段のシマと目的のシマとに分化するだけであつたのだが、新しい手段として媒介的事物が目標との関係に含まれるようになる。媒介物を使用する為には分化した意図の調節に応じる多数のシマ

の共応が必要であろう。意図的調節作用は器官や調整系の自己調整、それ故わざわざ顕在化する必要のない無意識的な調整を前提にしているから、心像は主体の活動に対して外から加わる全く新しい能力というわけではない。心像は具体的象徴として現在の知覚の場を越えて媒介と目標との関係を予期したり再構成するのである。しかし心像は媒介を操作する主体としての自己自身を実在の関係の総体の中に位置づけるには至らないという点で、知覚の場を完全にのり越えることができない。心像における活動の内的遂行がくり返されて単に媒介と目標との関係のみならず全体的場面を再構成できるようになると媒介物は道具となって一般化し、同時に道具を使用する主体は活動を遂行する自己意識においてだけでなく、いつでも道具を使用できる主体、すなわち道具を生産する主体として、一般化するのである。この表象機能はそれまでは実践的充実を目指していた活動が、その活動の結果ばかりでなく活動の展開そのものを意識することでもある。以上のように認識の発達は活動や身体の自己調整に強く結びついている。それでは一度概念的表象を手に入れると精神はその活動において自己充足し、自律的行為となり得るのであるか。認識の発達の通時的構造に続いて、認識の共時的構造を考えてみなければならない。

IV 認識における身体の機能

既に示したように、人間の最も原初的な層である感覚においてわれわれの体験するものは対象、まして感覚の質などではなくて、世界との相即関係 (Weizsäcker) そのものである。この場合の感覚器官はある対象を感覚するのではなくて、感覚することによって、一気にその生物学的意味を開示する。それ故感覚して反応するとは言えず、感覚することのうちに運動が、運動の中に感覚が含まれているのである。感覚は感覚を惹起するものや感覚するものが何であるのかを把握しようとするとなちまち消失してしま

う。例えば色は街の雰囲気や私の気分ではなく銀杏の葉の色に、音は苛苛した気持ちから騒しい声に変化する。感覚においては私の感官としての目や耳が刺激を把えるのではなくて、自己の存在そのものの情動性、換言すれば世界との根源的交流において世界の中に融け込むのである。意識が再び自己をとり戻すのは刺激を対象に、感覚を感官に帰する時であって、そうすれば感覚する体験そのものが変容してしまい感覚が意識によって把えられることにはならないだろう。それ故感覚は生きられるとしか言えない。それぞれの感覚器官による知覚の独立性は全身的反応、すなわち我れとして自己を、また対象として刺激を認識する以前の、前人称的・無記名的交流に基づいた相対的独立性にすぎない¹⁴⁾。すなわちわれわれが色とか音とかに集中しようとするれば他の感覚を犠牲にしなければならず、全ゆる感覚を同時に把えるというわけにはいかないし、他方対象の方もその一局面を開示するだけであって全面的に与えられるわけではない。ところがこの主体と客体の双方における制限・部分性は同時に認識を可能にするのである。同様にして、活動のシェマというものは全身的な姿勢活動を背景にして出現するのであるから、シェマを構成する為には身体の機能的構造との統一を前提にしている。シェマと身体とは常に交流し合って新しい構造を作るのだと言わなければならない。シェマの構成は概念的・論理的に為されるのではなくて、身体において身体の統一のもとに為されるものである。シェマの形態や機能的統一を意識したり説明したりするのは従って精々シェマが確立されたあとにすぎない。更にシェマにより獲得された対象の新しい局面や意味も無記名性の地平から浮き出たもの、その新しさの背後に未だ現われてこない局面や意味を指示するものであり、却って未知の潜在的な世界の多様性から位置づけられているのである。シェマの共応という現象も単に二つのシェマが結合するということには留まらず、それは身体の構造を再構成するのであ

り、共応によって実現されるのは主体の働きかける世界の新しい地平、より分化した主体の可能性の地平なのである。シュマの共応に伴う異質空間の同化は、それぞれの空間の共通の座標系としての身体に基づいて遂行される、それ自体身体とは無関係には成立しえない一つの機能的空間の出現である。また、個々のシュマにおいてその意味を担っていた対象は、シュマが共応する限りでの、共応そのものとの関係で明らかにされる意味をもつようになるのだが、このような意味もそれが共応において世界の意味の総体から分化すると同時に、またその総体の中に統合されねばならない。例えば模倣の行為を視知覚と触覚—筋肉運動知覚との結合、あるいは感覚と運動との外面的因果関係でもって説明しようと思えば、第三者的過程としての身体を意識が統合して視知覚の客観的空間関係を自己の身体で実現しなければならないだろう。ところが実際の行為においてわれわれが自己の身体の客観的な動きや空間関係などに注意をはらったり注目したりすれば、かえって意味のある統一的行為は意味のないバラバラな動きになってしまう。知覚は既に全身の筋肉系との関係を含んでおり、この筋肉系の自己調整と共に機能しているのである。それ故対象は身体をつうじてその構造を直接的に開示する。一般に感官は他の感官と常に交流しているので知覚された対象は全ゆる感官との原初的な触れ合いを潜勢的ではあるが遂行しているのである。意識が身体の空間的關係を把えるのは身体が意味のある空間關係を実現したあとであり、それも身体を介してである。共応や模倣は意識の行為ではなく身体の行為である。

認識の発達はこのようにして対象に対して働きかける身体の多様な可能性の〈沈澱作用〉として考えることができよう。われわれの周囲にあるいろいろな事物は客観的空間の中に位置づけられる前に、身体によって身体の右にあるいは背後にあるものとして位置づけられており、事物までの距離は目や手や足の中に刻み付けら

れている。それではわれわれが表象や概念を手に入れたとき、身体を含めて全ゆる存在が客観的世界へ移行するのであろうか。K. Goldsteinの示した具体的運動と抽象的運動の区別は表象能力によって説明されうるのであろうか。ところが具体的運動しかできないはずの患者は指示された運動を、指示する言葉の概念的関係を顕在化することによって実現しようと試みるのである¹⁵⁾。それ故表象機能が破壊されて具体的運動のみが残るのではなくて、表象機能も具体的運動も共に変容すると考えられる。表象作用は心像や象徴を媒介にして可能的あるいは不在の現実を再構成するのであるが、表象された世界が意味をもつのも対象の原初的・生命的な意味の総体や対象に対する実践的な諸可能性の地平を暗黙のうちに前提にしているからである。換言すれば思考によって把えられる対象も、その対象と主体との間に確立された最初の存在または価値の関係を保持しているのである。従って対象にせよ動作にせよ無数の相互作用や意味作用の網目のなかに位置づけられて、一つの体系を構成しているのだが、認識や行動が遂行される際に個々にわざわざ顕在化される必要はない。この身体のもつ世界について潜在的な知こそシュマの構築や思考の内容であり、内容はシュマや思考の形式に統合される限りにおいて更に豊かな意味をもつようになる。表象は行動の継時的体制化に対して、同時的体制化(Bruner)の作用として特徴づけることができよう。しかしこの同時的体制化は表象によって可能になったのではなく、運動を可能性の状態のまま保持するトーマス機能、内的に遂行される延滞模倣によって準備されねばならない。従って表象はその内容と同じく形式も、身体と世界との相互作用によって基礎づけられているのである。思考における概念や表象はそれ自体体系化して、理念的な世界や抽象的対象を構成するわけだが、その為には身体における活動の組織化と同じように、主体と対象との相互作用として機能する表象活動や言語活動の組織化が必要であ

る。従って概念的の世界における主体と対象の相互作用は、内面化された活動として身体と世界との相互作用を高次の段階に吸収するのである。そうすれば対象は実践的可能性の地平と同時に概念的意味の相互作用の体系のなかに位置づけられるようになり、同じようにして対象に対する活動も、身体的シエマの可能性として提供されると同時に表象として提供されるようになる。認識の発達とは主体と世界との相互作用がさまざまな調整系に基づいて相互作用の射程を空間的・時間的に拡大していく意味の世界の構築である。他方主体として把握される有機体は「常に、自ら形成する〈意味の単位〉の表明」¹⁶⁾なのである¹⁷⁾。(博士課程大学院生)

注

- 1) 対象の意識を阻止された素描の運動そのものとして扱えたのはチャン・デューク・タオ「現象学と弁証法的唯物論」(合同出版、竹内訳、1971)であるが、彼の関心は物質と意識の弁証法であるので、活動の図式化や調整系・自己調整については語っていない。ある行為が次の段階の下部構造として素描される為には図式化と調整作用が伴わねばならないということが主題である。
- 2) モノー「偶然と必然」(みすず書房、渡辺他訳1972)、C. H. ウォディントン「生命の本質」(岩波書店 白上他訳 1973) 参照
- 3) ボイテンディク「人間と動物」(みすず書房 浜中

- 訳、1970) 69—70頁参照
- 4) この具体例はK・ゴールドシュタイン「生体の機能」(みすず書房 村上他訳 1970) 81—98頁参照
 - 5) K. Lorenz: *Studies in Animal and Human Behavior*, Harvard Univ. Press, (1971).
 - 6) S. A. Barnett: *Instinct and Intelligence*, Prentice-Hall, 1971, pp. 111~145.
 - 7) K・ローレンツ「鏡の背面」(思索社 谷口訳 1974)
 - 8) L. V. Bertalanfy: *General System Theory*, Penguin Books, 1973.
 - 9) J. Piaget: *Biology and Knowledge*, Edinburgh Univ. Press, 1971, pp. 18~25.
 - 10) V. V. Weizsäcker: *Der Gestaltkreis*, Suhrkamp Verlag, 1973.
 - 11) フロン「児童における性格の起源」(明治図書、久保田訳 1970) 184頁
 - 12) J. Piaget: *Play, Dreams and Imitation in Childhood*, Norton Library, 1962, pp. 42~43.
 - 13) J. Piaget, *ibid*, pp. 30~45.
 - 14) M. Merleau-Ponty: *Phenomenology of Perception*, Routledge & Kegan Paul, 1962, pp. 207~242.
 - 15) K. Goldstein: *Human Nature—In the Light of Psychopathology*, Camb, Harvard Univ. Press, 1951, K Goldstein: *Selected Papers*, Martinus Nijhoff, 1971.
 - 16) F. J. J. Buytendijk: *Prolegomena einer anthropologischen Physiologie*, Otto Miller, 1967, S. 27.
 - 17) ここで言うシエマの意味と Piaget や Merleau Ponty などの使用するシエマとの関係についてはあまり言及できなかったことを付記しておきたい。